

ふくしま浜通り文化育成および発信事業ワーキンググループ 活動に関する報告書

安部 良

建築家、安部良アトリエ一級建築士事務所代表

2019年度ふくしま浜通り文化育成および発信事業ワーキンググループ座長

1. 背景
2. ワーキンググループ会合の沿革と内容
3. 会合以外の活動
4. 考察：ワーキンググループの活動を通して
5. 今後の目標

1. 背景

「ふくしま浜通り文化育成と発信事業ワーキンググループ(以下、当WGまたはWG)」は、平成31年度大学等の復興知を活用した福島イノベーション・コースト構想促進事業「早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター」(研究代表者：早稲田大学教授・松岡俊二)のもと活動を行なっている。当WGは、2019年1月27日の「第3回ふくしま学(楽)会」(場所：ならば CANvas)において提案された「ふくしま浜通り社会イノベーション・イニシアティブ(SI 構想)」の具体化を進めるための「場」の一つであり、2019年5月24日の「ふくしま浜通り芸術祭準備・懇談会」(場所：ふたば未来学園高等学校)の討議を基に会合を設けてきた。この会合は、「ふくしま浜通りにおける地域アート等による地域の魅力や価値の創造」実現に向けた、具体策の取りまとめを目的としている。

2. ワーキンググループ会合の沿革と内容

2-1. 前提条件の確認

ふくしま浜通り芸術祭準備・懇談会

開催日：2019年5月24日、場所：ふたば未来学園高等学校

芸術祭準備・懇談会では、福島県浜通り地域で事業を進めるにあたっては、①慎重に議論を進めていくこと、②地元の住民感情への配慮の必要性、③子どもたちの未来のためのプログラムにする、という3点が共通意見として挙げられた。

2-2. 課題の整理

第1回WG会合

日付：2019年6月14日、場所：早稲田大学

「芸術祭」と呼ばれる国内外の取り組みについては、地域おこしの成功例として語られる一面がある一方で、開催地域での役割や効果、経済的負荷などをめぐり様々な課題があることも認識している。それらの課題認識に基づき、ふくしま浜通りにおける地域アートの可能性を探る前提として、まず日本および世界における「芸術祭」、「地域アート」の歴史と潮流を整理するため、日本における屈指のアートライターであり、また数々のアートプロジェクトのマネジメントにも携わっている住吉智恵氏を講師に迎えて会合を開催した。

18世紀のパリ博覧会を起源とし、1895年にはじまったヴェネチア・ビエンナーレ、そして20世紀中頃から世界各地で行われるようになった国際芸術展がある。そしてその流れを汲みつつ、2000年代のバブル崩壊後の日本において、新潟県の越後妻有アート・トリエンナーレ、香川県の瀬戸内国際芸術祭等、地域型と呼ばれるタイプの芸術祭の他、愛知県や横浜といった都市部での国際芸術展等、幅広く認知されるようになってきた。

しかし日本国内の現状を見れば、「芸術祭」的イベントが各地で行われているにも関わらず、継続的事業として続いているものはごく僅かである。芸術祭としてのクオリティが高く評価されたとしても、たった一度の開催で終わってしまうイベントもあった。住吉氏は芸術祭の役割と効果について、様々な側面からの視点を示している。そして住吉氏の報告の後の討論において、下記のような課題や問題意識が示された。

- ・ 芸術祭（イベント）の成功と失敗を評価するものは何か？
継続性、芸術祭としての外部評価、地域住民の繋がりやコミュニケーションの拡大等、評価基準となるものは様々である。

- ・ 大きな芸術祭を継続的に行っていくための財源の欠如。
巨大なアートマーケットや有力なコレクターのバックアップもなく、瀬戸内国際芸術祭で言うところの福武財団のような強力な支援者もない。
- ・ 祝祭的な芸術祭の開催が浜通り地域での現状に即しているかどうか。
外部の企画が一方的に持ち込まれたり、行政主導で行われたりすることは、いずれも地域住民の気持ちが追いつかないのではないかと。住民が受け身のまま巻き込まれていくのではなく、自律的な地域住民の行動や意識が不可欠である。
- ・ アートマネジメントに特化した人材、適切なキュレーションが行える人材が必要。
- ・ 浜通り地域内で分断が起こらないような地域連携が必要。
- ・ そもそも、芸術祭や地域アートによって解決すべき問題はどのようなものなのか、考えなければいけない。

2-3. 課題の発見

第2回 WG 会合

日付：2019年10月7日、場所：早稲田大学

芸術祭や地域アートを行うにあたり、ふくしま浜通りにおける課題を発見するため、先駆的事例として同じく原子力発電所の経済的影響を受けている東北地域の一つ、青森県七戸地域で地域アートの活動を続けている美術家、ヴィヴィアン佐藤氏を講師に迎えて会合を開催した。

ヴィヴィアン佐藤氏が行ってきたボトムアップ型の地域アートプロジェクト「七戸町ドラキュラ de 町おこし」事業についての報告。ここでは地域社会と人々の潜在的な魅力と価値を発見するための、5つのワークショッププログラムについて実際のワークショップ風景の写真などを交えて発表していただいた。

それぞれのワークショップには、「地域」を様々な角度から見ることを人々と共有するためのアプローチが含まれている。また、そうしたワークショップを経てアートという形を演出させることで、様々な年齢や来歴の人々にとって、地域での新しい価値が見いだせることを伝えるものでもある。

また、当会合では「早い・強い・大きい」を目指す現代の資本主義的価値観が大きくなりすぎることにより、人々や社会が断絶してしまったり、生活が行き詰まったりする現実があるということをヴィヴィアン佐藤氏より伝えていただいた。そしてそれに対して、「遅い・弱い・小さい」価値観が意味を持つのだと再認識できるような取り組みが、今の浜通り地域には適しているのではないかと、この課題認識が共有された。

また、当会合の後半には「浜通りアートミュージアム&ラボ事業」の概要説明が行われた（内容は当報告書 3-1.参照）。

当会合で行われた討論においては、上記のほか下記のような課題や問題意識が示された。

- ・ 地域での活動においては、記録と発信をきちんと行い、地域からのフィードバックを得ながら丁寧に進める必要がある。
- ・ 「浜通りアートミュージアム&ラボ事業」の計画に際し、アーティストだけではなく地域内にカウンターパート的存在がいて、それらと連携していくことが重要だと分かった。
- ・ どのような形態の取り組みを行うにしても、継続して行うことの重要性。
- ・ 地域に住む人々それぞれが自立し、みずから地域の魅力を創出していけることが大切であり、地域外の間人はあくまでもサポート的な役割に徹するべきだと認識はしているものの、そのどちらも立ち行かなくなっている現状がある。地域内外を問わず人々の共感を得られるプロジェクトが必要である。
- ・ 住民のニーズや希望を直接ヒアリングすることが重要である。
- ・ 原発に依存してきた地域が、依然として復興補助金や廃炉産業に頼っている現実がある。地域内で起こっている様々な分断を乗り越えられるような「地域アート」が可能かどうか、模索する必要がある。



図 1, 2 第 2 回 WG 会合風景

2-4. アート関連事業の方法の模索

第3回 WG 会合

日付：2019年11月29日、場所：広野町公民館

「地域に寄り添った」大型の芸術祭でなく「人に寄り添った」柔軟なアート活動の可能性を探るために、先駆的事例として東京都で開催されている TURN の主催者であるアーツカウンシル東京から、畑まりあ氏を招聘し前回の登壇者ヴィヴィアン佐藤氏とともに広野町で会合を開催した。当会合は福島県広野町での開催ということもあり、広野町役場からの参加者も多かった。前半はヴィヴィアン佐藤氏より、前回、早稲田大学で行った第2回 WG 会合での内容をベースに報告を行っていただき、後半に畑氏の報告と、アーティストの森野伸次氏による「時の封～ひろの 2120」（当報告書 3-1.参照）の開催状況等の報告、早稲田大学から「第5回ふくしま学(楽)会」（当報告書 3-3.参照）の概要説明が行われた。

また、会の初めには広野町復興企画課課長の小松和真氏より、「住民が安心して暮らせる環境づくり、文化やアートを通じ地域のプライドを取り戻すことが重要である。地域の魅力を再発見する地域づくりのあり方を考えたい」という趣旨のコメントをいただいた。

アーツカウンシル東京、NPO 法人 Art's Embrace、東京藝術大学、東京都が主催する「TURN プロジェクト」は、違いに価値を見出すアートの特性を活かし、多様な人々との出会いと交流を生み出すアートプロジェクトである。監修は東京藝術大学教授でアーティストの日比野克彦氏が務め、福祉とアート、「ちがひ」や「多様性」といったコンセプトを軸に、アーティストと福祉事業所の協働プログラムや展覧会、トークイベントなどを行っている。TURN は障害者だけでなく、ひきこもりやセクシャルマイノリティーといった様々な領域へも関係性を拡大させ、ダイバーシティを追求していく活動であり、また、「TURN」という言葉は、それらの活動全体を包摂する新しい概念そのものでもある。

TURN の取り組みは、「アートプロジェクト＝作品をつくる」という枠組みを超えて、人々の交流を促し、自分とは異なる他者の価値観を知り、“学び合う”場を提供している。今まで見えていなかった可能性や価値に、ひとりひとりが気づくこと。それが様々な社会問題の解決の糸口になるのだという視点を、この報告では共有することができた。また、活動実績が豊かな TURN プロジェクトの運営方法や、意思決定のプロセス、関係する外部施設との連携手法を学ぶことで、今後の浜通り地域での取り組みにも活かすことができるだろうと考えられる。

当会合で行われた討論においては、上記のほか下記のような課題や問題意識が示された。

- ・ 地域で潜在的な魅力や価値を掘り起こせる人材や、地域の人に魅力を発見してもらう

場づくりが必要。

- ・ 興味がない、もしくは自分とは関係ないと思っている地域の人々が参加できるきっかけづくりが重要である。
- ・ 市町村レベルの行政においては、文化芸術分野に許される支出は少ない。
- ・ 福祉系の予算の中で文化芸術分野を関連させ、新しい企画が可能になるかもしれない。
- ・ 文化芸術関連事業は、採算性といった経済的尺度で計ることは難しい。文化的価値とその重要性を理解してもらう必要がある。
- ・ 採算性や経済効果という価値評価も重要であるものの、短期的な成果を求めるのではなく、地域で時間をかけて何かをするという姿勢に価値があるのではないか。
- ・ 行政とアーティストが直接やり取りをすることなく、イベント会社などが間に入り、単発で終わっていく事業が多い。どうすればアーティストに継続的に地域に来てもらえるようになるか。
- ・ 経済的尺度を把握しながら、文化芸術事業を展開できるようなマネジメント人材、様々な役割の人々を組み合わせた仕組みづくりが不可欠。
- ・ 「浜通り地域」とはいったいどこのことなのか？気候や風土に共通性を持ちながら、それぞれの行政区が異なった特徴を持っている。
- ・ 「地域の人」というのは誰か？捉え方は様々。
- ・ 少子高齢化は浜通り地域だけの問題ではない。アートの特性を活かした事業を行うことで、この地域でモデルづくりが可能になるのではないか。
- ・ 地域アートについて（町から）県に支援を提案する場合、広野町単体ではなく、双葉郡や浜通り地域といったまとまりで提案するほうが良いのではないか。
- ・ 10年後、20年後といった長期的に予想しづらい事業に対し、行政は予算をつけにくい。



図 3, 4 第 3 回 WG 会合風景

2-5. 福祉領域と融合するアートの可能性

第4回 WG 会合

日付：2020年1月16日、場所：早稲田大学

様々な人に寄り添うアート活動の中で福祉的な領域を取り込むことの可能性を探るために、先駆的事例として、地域に開いた福祉環境を運営している藤岡聡子氏(株式会社 ReDo、ほっちのロッヂ代表)と、福祉施設でのアート活動を継続しているアーティスト・山本麻紀子氏を迎えて会合を開催した。

藤岡氏からは「ケアの文化拠点のつくり方」という内容で報告いただき、自身が現在取り組んでいる長野県軽井沢町の施設「ほっちのロッヂ」の立ち上げと運営に関する内容を中心に発表していただいた。

「ほっちのロッヂ」は症状や要介護度といった尺度によって利用者を定義・区分する従来型の施設とは異なり、「症状や状態、年齢じゃなくて、好きなことをする仲間として出会う」というコンセプトを掲げている。介護対象者(介護される側)ひとりひとりが培ってきたその人ならではの知識や生活文化に着目し、それらを引き出し交流することを施設の課題の一つとしているのが特徴だ。地域の子どもたちが気軽に立ち寄れる場としても施設を開くことで、多世代・多領域の交流を生む施設を目指している。施設の事業内容は「訪問看護ステーション、診療所、病児保育室、デイサービス」としているものの、それぞれの枠組みにカテゴライズしきれない、様々な取り組みを包摂しているのが「ほっちのロッヂ」の手法でもある。

また、看護師ら施設の働き手には自身の強みや個性を表現してもらうことを求め、介護「する側」と「される側」それぞれの創造性を引き出し、文化交流拠点としての場づくりを行なう。そのほかにも「ほっちのお茶会」といった地域イベントを月に一度開催したり、クラウドファンディング支援者を「ほっちのロッヂャー」と称し仲間づくりを行なったり、福祉の関係人口を創出する取り組みや工夫についても発表していただいた。

アーティストの山本氏からは、自身が京都市東九条地域で行なっているアートプログラム「ノガミッツプロジェクト」の概要を中心に報告をしていただいた。ノガミッツプロジェクトは京都市にある総合福祉施設・京都市東九条特別養護老人ホーム「東九条のぞみの園」において行われており、2018年の発足当初は京都市「文化芸術による共生社会実現のための基盤づくり事業」のモデル事業として、東山アーツ・プレシメント・サービス(HAPS)企画で進められた。2019年度以降は京都市の事業としては継続されず、施設の独自予算により山本氏を招聘し、事業は続けられている。

その後の討論では、以下のような課題や提案が出された。

- ・ 福祉の場面や地域における第3者としてのアーティストの存在意義や、関係人口を増やすための取り組みや方法、役割づくりとは？
- ・ 現地で人と人が出会うプロセスを作り出すことが芸術の重要な役目である。
- ・ 特殊なコミュニケーションプロセスを「アート」と呼ぶような芸術の意味の捉え直しも始まっている。
- ・ 「記録」という客観的・専門的手段で研究者がアーティストの価値を分析できるのではないか。そういう形でのコラボレーションがあるのでは。



図5 第4回WG 会合風景

3. 会合以外の活動

WG 会合が浜通り全体の中長期における地域アートのあり方を探るための先駆事例の紹介と専門家との討論の場であることに対して、会合以外の具体的な取り組みは短期的かつ限定された地域で、いくつかの実証実験的な事業を同時進行してゆく場と位置付けられる。以下に 2019 年度中に実施・計画した取り組みを報告する。来年度もこれらの活動を継続していくと同時に、多くの地域での多様なアートプロジェクトを計画していきたい。

3-1. 浜通りまちなかアート&ラボ事業

「浜通りまちなかアート&ラボ事業」では、中小企業基盤整備機構の「賑わい回復支援事業」に係る助成事業を活用し、浜通り地域で具体的なアート活動として 2 つのプログラムを計画した。NPO 法人広野わいわいプロジェクトが実施主体、または協同開催者となり、当 WG ではその計画内容の検討とアーティストの調整等を行った。なお、2 つのプログラムのうちの 1 つは台風 19 号被害の影響により中止された。

- ・ 「時の封～ひろの 2120」

アーティストの森野伸次氏が代表を務める「アートプロジェクト気流部」と、京都大学教授の大手信人氏のジョイントプロジェクト。

広野町の海辺や山で採集した植物の断片を押し花、押し葉にし、ラミネートフィルムで圧着したのち、展示やインスタレーションへと発展させる。制作はワークショップ形式で行い、子どもから大人まで自由に参加できるプログラムとした。当初は年度中に計 6 回のワークショップを開催し、第一回目のワークショップを 2019 年 10 月 27 日に行う計画であったが、台風 19 号被害の影響で同時開催の「フェスティバル FUKUSHIMA! in 広野 浜通りで盆踊り!」が中止となったこともあり、第一回目が 2019 年 11 月 30 日・12 月 1 日、その後 12 月 14 日・15 日、2020 年 1 月 26 日、2 月 22 日～3 月 11 日に開催した。

- ・ 「フェスティバル FUKUSHIMA! in 広野 浜通りで盆踊り!」

震災後、福島県全域及び全国での活動を継続しているプロジェクト FUKUAHIM! との共同で、地域住民全員が参加できる新しいお祭りを企画。

大友良英氏率いる「大友良英スペシャルビッグバンド」の生演奏をバックに、広野盆踊り保存会やいわきサンバチームのパフォーマンスなど地域文化の継承と幅広い人々の交流が期待されたが、開催直前に直撃した台風 19 号の影響による福島県内の深刻な被害を受けて、中止することとなった。

3-2. ヴィヴィアン佐藤 浜通り Vivi 行脚

資本主義経済が体現する「強く、早く、大きい」価値観と対極にある「弱く、遅く、小さな」価値観を、個人史の中に発見して表出させていくことが、大きな経済の力で様々な事物の連関が分断されている地域においては有効かもしれない。2019年10月の第二回WG会合でその可能性について提示されたことを受け、2019年11月28日、広野町のNPO法人わいわいプロジェクトの磯辺吉彦氏とヴィヴィアン佐藤氏の同行のもと、広野町から南相馬市原町地域にかけて、震災後の復興支援活動をされている方や、地域に根ざしたお惣菜店を営む家族、お寺の住職等、現地の方のインタビューをしながら縦断した。ひとりひとりの体験や現在の暮らしぶり、自身が行っている地域での取り組みについて様々な声を聞くことができた。

3-3. ふくしま学(楽)会

2020年1月26日に行われた「ふくしま学(楽)会」において、当WGの活動内容を報告。WGからはヴィヴィアン佐藤氏、福島県いわき市在住のアーティスト藤城光氏らも参加し、ふたば未来学園高等学校の生徒とトークセッションを行った。

3-4. その他のリサーチ、打ち合わせ

- ・ 打ち合わせ ①

日付：2019年12月20日、場所：早稲田大学

畑まりあ氏（アーツカウンシル東京）と、TURNプロジェクトと当WGの連携や、今後の共同研究体制に関する可能性について打ち合わせ。

- ・ 東京藝術大学 DOOR プログラムの見学

日付：2019年12月2日、2019年12月23日

東京藝術大学が社会人向けに開講している履修証明プログラム「DOOR」の授業を見学。受講生はDOOR受講の社会人のほか、東京藝術大学の在校生も含まれており、社会人と藝大生がともに福祉と芸術について学ぶプログラム構成となっている。

- ・ 打ち合わせ ②

日付：2019年12月25日、場所：早稲田大学

新妻葉子氏（東京藝術大学 DOOR プログラム担当）と、DOORプログラムと当WGの連携や、今後の研究体制、ならびに共同授業の可能性について打ち合わせ。

- ・ 打ち合わせ③

日付：2020年1月10日、場所：J ヴィレッジ
J ヴィレッジ、三菱総合研究所、KADOKAWA と、アート関連事業での共同の可能性について打ち合わせ。

4. 考察：ワーキンググループの活動を通して

4-1. 浜通り地域らしい“芸術祭”の可能性

2011年に起こった東日本大震災の後の福島県浜通り地域では、津波による直接的な被害はもとより、高濃度の放射線による住環境の閉鎖や、避難生活の長期化などを経て、様々な事物の連関、人々の連関が分断され、生活環境や地域コミュニティーに種々の課題が生まれている。震災から8年が経過した2019年時点でも、子育て世代の転出や少子高齢化が進む一方で、復興支援作業員の増加や移動により地域の状況は刻一刻と変化し、各市町村間での賠償金格差、復興スピード格差など、住民同士の繋がりに様々な不可視のバリアが存在している事が観察できる。こうした状況では、地域の課題解決を目指した大規模な芸術祭を開催するためのコンセプトやテーマを共有する事が難しく、「浜通り地域」としてまとまりを持ったイベントを継続的に開催し続けることは難しい。

復興と原発事故処理という二つの大きな課題を抱え、常に外部からの知見やさまざまなリソースに曝されてきたこの地域では、復興事業を「受け容れる」ことに多大な時間と労力を費やしていることが伺える。ここにさらに従外型の、外部の経験知やリソースに根ざした「芸術祭」を持ち込んでしまえば、地域内にさらなる疲弊感と分断をもたらしかねない。今この地域で求められていることは、一過性の起爆剤的な地域活性事業ではなく、地域住民の声に寄り添い、地域で生活する人々が知り合う・考え合うことのできる小さな場をたくさん形成していくことではないか。そしてその地道な取り組みの中から、内部の発信力を育み、結果的にこの地域らしい新しい“芸術祭”ができあがっていくという将来像を提案したいと考えている。

4-2. 福祉とアートの役割

地域性や地域コミュニティーといった、ある種の“まとまり”に寄り添うことが従来の地域アートだとすれば、個々人の価値観や気持ち、またそれらの違いに根ざした、よりひとりひとりの“人”に寄り添う「福祉アート」的な方策こそ、今日の浜通り地域にはフィットしているものと考えられる。

広義の「福祉」という言葉は、人間ひとりひとりの安心や幸福、充足を意味する。東日本大震災と原発事故の被害者は、「地域」という単位であると同時に、やはりその中に暮らす個々人であったはずである。傷つけられた個人を手当てし、自律／自立した個人を育てていく。その先にこそ、ともに考え合い、人間らしい繋がりを持ったコミュニティーは形成されていくのではないだろうか。

今ここでは様々なバリアや違いを受け入れ、対話を可能にすることが求められている。そしてそれはまさしく福祉的領域の話であり、同時に違いや障壁、アイデンティティ、個人の創造性に寄り添うアートによってこそ可能な手当ての方法が考えられるようになっていくのではないだろうか。

人々のあいだや社会のなかにある様々なバリアを認知し、解決していく手段としてのアートプロジェクト、ひとりひとりのアイデンティティの表現を手助けするようなアートプロジェクトを推進しながら、行政区の枠組みを超えた人同士の繋がりを回復していく。そのような活動を継続することによって住民同士の間に関連感が芽生え、「浜通り」という地域性を持った芸術祭が将来的に可能になるだろうと考える。

4-3. 取り組み体制

一つのテーマを共有することが難しい地域であるからこそ、トップダウン型の取り組みや大型の復興事業ではなく、その土地の住民ひとりひとりが自律し、地域の中で誇りを持って生活をし、コミュニティや関係性を構築しながら取り組めるボトムアップ型の枠組みが有効であると考えられる。もしくはトップダウン・ボトムアップのいずれでもなく、完全なる一方通行によらない双方向性のあるプロジェクトのあり方が模索できるかもしれない。そのために必要とされるのは、地域の様々な課題に対し、コミュニティの内・外を問わず積極的に、かつ透明性の高い形での議論の場を整備することである。そしてそういった場の整備にあたり、すでに行われてきている先駆的取り組みの手法を学んだり、すでに動き出している地元NPOなどの活動を組み合わせたりすることで、局所集中的な実行労力の負荷を避けることも可能であろう。それら外部の活動とそのメソッド、行政、そして地域住民を接続させるための役割を、ワーキンググループの次の段階では担っていけるものと推察する。

そして将来的には、浜通り全域におけるそうした活動を牽引する母体として、従来の美術館に変わる文化育成と発信のための施設として、社会芸術リサーチセンター&ラボ機関の設立が重要になると考えられる。浜通りに進められている先端学術研究機関計画とリンクする事で国際芸術・学術拠点、アート&サイエンス研究センター構想へと結び付けられるであろう。

5. 今後の目標

5-1. 短期的目標《2020年：ランディングプロジェクト》

- 1) 人と人を繋ぐ様々な小中規模のプロジェクトをスタートさせる。
- 2) 高齢者や障害者を中心とした福祉アートプロジェクトを主導。アートが媒介となる事で高齢者や障害者が人々を繋ぐ役割を担い、高齢者施設、障害者施設が小さな文化施設として地域交流拠点となるようなテスト事業を運営する。
- 3) 浜通りの小中高校生とアーティストが共同で作るアートプログラムを開催。
- 4) 2019年にスタートした「まちなかアート&ラボ事業」を継続し、複数の地域で複数の新規イベントを企画。
- 5) 海外に対して「ふくしま浜通りの“今”」を発信するようなアートプロジェクト、メディアプログラムを企画。
- 6) 海外の建築、環境、芸術系大学などと連携し、国内大学との学生交流プログラムを開催。

5-2. 中長期的目標《2021年～：復興と足並みを揃えた活動》

- 1) 子ども達のアートプロジェクトの成果を国内、海外で発表するプログラムを行う。
- 2) 里山、里海の整備を通して人と自然の連環を育むアート&サイエンスプロジェクトを企画。
- 3) 前項に挙げた個々のプログラムを、総じて「浜通り ふくしまちアートプロジェクト（仮）」として主導。2020年にスタートした事業も継続させながら、それぞれのプロジェクトやそれぞれの場所を繋げるイベントを開催。
- 4) 前項事業や農泊事業などと連携した環境整備と街並み景観整備。
- 5) 「廃炉イノベーションセンター（仮）」の設立。
- 6) 「福島浜通りアート&サイエンス研究機構」の設立。
- 7) 前項の一機関として、芸術科学の研究と社会貢献事業を結びつける「ソーシャルアートラボ（仮）」の設立。将来的な浜通り芸術祭の企画運営の中心的母体となる。

(以上)

添付資料一覧

- 1) ふくしま浜通り芸術祭準備・懇談会 議事録
- 2) 第1回 WG 会合 議事録
- 3) 住吉知恵氏報告資料
- 4) 第2回 WG 会合 議事録
- 5) ヴィヴィアン佐藤氏報告資料
- 6) 第3回 WG 会合 議事録
- 7) 畑まりあ氏報告資料
- 8) 第4回 WG 会合 議事録
- 9) 藤岡聡子氏報告資料
- 10) 「時の封～ひろの 2120」関連資料
- 11) 第5回ふくしま学（楽）会における WG 報告資料